



KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000

Kodak LICENSED PRODUCT



貞操婦人賢誌  
上編

2913  
15











仁義禮智忠信孝悌  
 稱之謂八行貞操誠  
 節勇烈和順及林謂  
 八行彼里見之八犬  
 士是豊島之八賢女

貞操婦女八賢誌五編上

東都 爲永春水編次

第九回

駒舎の病で阿竹郷信を听く  
 奸計を逞て苦七暗夜を走る

再説 歛入の苦七の甘舌の欺り色行の旅店の侍ひり先  
 次の間小憩つせ其身の阿竹の外房のりり今日の内容  
 休て舞ねて後苦七が変をも知らせんと思風のうちをまき  
 覗くみ於竹の病の旁をまきやうとく眠り極子也歛入の  
 右辺左辺と夜着の裾をど推付て寐顔せつりぐ歩海也

女八賢四輯の一

ア承々の以病氣ゆゑお可也相の此頃へめりまりと一之也  
類の疲と息を然ても兄さぬ梅太郎、青柳さぬでもお側  
居て此分絶を言さう支せ力の以病氣の全故及も  
此をどう茶の代の調方の辱儀の穢み身を替りて居  
終日人の座らぬお側へ入居る者もなくお心細さなり  
増て猶血病氣の疎らうと思へど他は病もなく世と  
時とを此やうの侍をさうあふも侍なくて年増もゆくぬ  
懐さぬの苦勞とさせまはりしうきよと獨言り思へども

わろりと顔と一滴の泪を流すおれはれがら返らぬ様  
言他が関りをまごも憐憫此痛なり言へは問て茶の  
は度二ツあり苦七どのが後侍らぬドレ次の問へと言ひつても  
茶土籠とてぬ籠てゆを苦七の侍うけてコレ敵八どの様  
さぬハ愛のこまも在まぬくと問へまて敵八歩負願別  
驚りのみならずねどもは種よりのお勞さぞ今もやくと  
お寐入たるはるぬ茶を焚あげお目グ覺へて貴行と  
保めお目めうらと仰うの相續先交まて六貴行も其行を  
寛りと休んで下さぬよア世がせさう酒ひらると言ひ及

場下やが何言ふも其日くみ退りて負苦承置でなうか  
汗しや息ト言ふせ若七が赤濁てその挨拶の人めも寄る  
貴所と下奴ハ昔くら一ツ在所ハ成長兄弟よりさ  
睡ましくひら小福の茶粥さえ送ひぬ喰ひし中を  
今きくら何の遠慮ウある心あるく用ひらぶ何ありと  
使ひよるへ下奴もと息を神宮を承り進つけし體史  
良せ室しくあそひらんより細くが返りて勝多き茶が  
るく医者へもらん汚き物ハ何もさき水がなるくを  
汲んで来んと好智の厨一若七のあはる殿ハが氣の

入らんと猶も言を綴ハが公は使何なりともおろね  
領まら又喜悦て貴行が然うりよ公さう下奴が為は  
大なる補佐今より候お行さぬの力とて以て  
此の一日も速く全仕るべき事ある大六とト言ふを  
須臾と押禁め嗟音さし一登の身脱ぬ郷めも言ふ  
通り那知縣の執念もかん身等も僕ノ行傍共今  
猶整美の最中なるみ昨夜神宮の強劫よりいよく  
整美の教しけは忍びくみ遠行また退隊のまかり  
居らんも知れどより然うりくとも人おけ家のまも健めハ

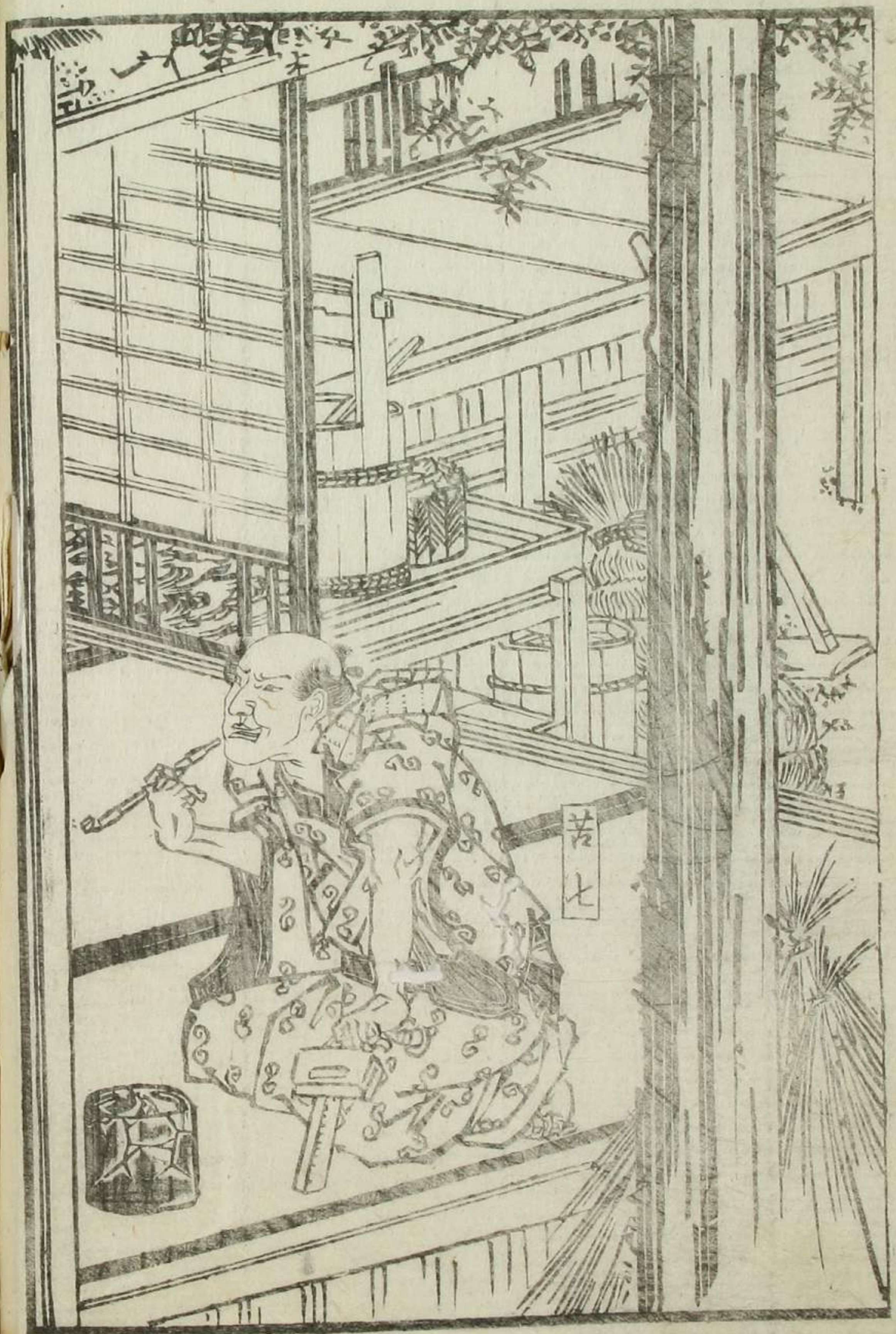


からド开せ知りるごと放公こと此家お初てあらんり  
張のうぬ居るよりも場を危き変るるむやおん身への  
男もろ知らぬど候令嬢さぬハ心痛氣でも初る危うき  
場竹の居て追隊の捕へら且んより竹島の地のみま色  
竹と身の幅廣く有りて後心安らぬハ介抱せと嬢  
さぬの心痛氣も自と全渡さぬひなん支の枕ても梅さぬの  
お行房をさぬ知るるるどよまきお別もあるるさぬト言ひけりて  
曲廻を見まへ一些小膝を扱ませおん身ハ実の梅さぬの  
ゆゑは知りさぬぬる若さぬ一ゆても此行ぞとゆあら

當りのちるるど色？まぶ我等も初りさぬへ悪いやう  
斗らふまどと同じ色て秋八念がと梅さぬハ去年の秋  
壁相模路へとむりゆてゆ先せき報知らぬねが今ハ  
竹園の居るゆゑとも知るゆゑゆらねども縁倉ハ懸花  
の地ゆゑ若も那竹の居るぬハんうと思つてゆて尋ねん  
ぬも嬢さぬハ此始末ゆつゝ其後ハお捨さぬが今ハ尋  
ねる為もま一开ハ是非もさぬ変るるさぬが今さう言ふとも  
詮るゆゑどまよりも先さう當るお竹さぬのおん身の安  
危余がど懸釜の教しるるさう一此辺ハ片時も斯くて

あんなの電の危しと言へ今の子孫を記す  
自由なる那嬢を奈のしと此家を伴ふにやるべき  
當惑の只是のそらと身を半残の野へもるく他國へ行  
きも使ふらんけり了る我等に及ぶも此身の異見の奈の  
ぢやと言ふを苦七の所ぢぢ斯る火急の場ふのぞと未の  
末まで考へてふらうく同の命を度でるし候令盤纏の  
野へもくともかん身と二個が心を合せ此場を道はさる  
此の神を七も嬢さぬの空腹思ひのさませたまふと  
心るき行なるがう今も夜合を勝ふようむを待めて

二個が腰を先十かふらうて嬢さぬのみ茶をまら今宵  
二更の鐘と偲み俤の那る明暮籠の嬢さぬを救ひ  
入る脊負て密の裏によう忍びぬる家内のものも  
氣のたぐまのうらと一に脊の腰の替がと一我等の  
任せと並ぶへと言ふも猶獄人の基より山路の男  
ゆゑ応らうつらとと思ひまらせ此月比屋をまを受  
るる様影の代も涙さぬの道行をまらんの道てま  
る男ども今更の苦七が言話の順ハねとまらく危き  
此場の存不幾と六知ほどお主のなる今宵ハは候途る



とも再び世におく其時ハるる予ハ仇ハ見ユと云ふと公の  
裡ハ誓ヒツ須臾ハらつて歩ム顔ハるるも公ハ身ノ言ハる  
事ハ此ノ道ハそむくとも見タラシム其先ハ道ハる  
あくるハ一歩ハるるハ四身ノ體意ト云ふ計ハハるる  
言ハと苦七ハ歩听テ歎キ得ララト思ハぬと公ハ笑セ舍レ  
ども更ハるるも顯ハるる尚も余疾ハ時ラララト云  
昏ハるるハ宿屋ノ婢女們ガハ得テ垢テ文解セま  
むらぬぞ二個ハ程ハるる喰ヒは舞ハト云ハ竹ガ紙ラる  
子ハ夜夜ハ八ハ一間ハるる茶ト云ハ粥ト云ハせ席

苦七ハ更ハるる如ク一伍一什ト譚リ新ラるる危ラるる場ハるる  
今宵蜜ラるるけ家ト云ハ出ラるる國ハるると公ハ供ト云ハ退隊ノ  
難ト云ハ道ト云ハヤキんハ公ハ支度ト云ハと云ハてよト云ハるる  
孩ト云ハくノ苦七ハ更ハるる悪ト云ハ公ハりト云ハ切雅ト云ハ公ハるる  
ハけ且ハ八ガ言ハぬ但セ公ハ接ヘセラるるけラるる  
其夜ト云ハ謂更ラるる遠寺ノ鐘ト云ハを響ラるる生バト云ハ其ハ  
身ハ禪ト云ハ今宵ハ他ト云ハ相宿ト云ハもるる勝ト云ハぬ婢女ト云ハガ  
衆ト云ハ操音ト云ハ奴僕ト云ハ等ガ業ト云ハあらるる最可笑氣ト云ハるる  
声ト云ハも沈身ト云ハくハ止呆ト云ハテ跡ト云ハハ野ト云ハノ声ト云ハらるる夜ト云ハハ深ト云ハ

更るぬぞ時分ハよりと外房より苦七の卒度起出て  
歎八と侶俱小片辺有合の空着霧小お行せ密の  
敵ひ入と苦七の声を低ませて吾們の先此葛霧を肩ふて  
脊戸より徐々忍び出さ一かん身の後を見まらりて一品  
此ても取落さぬを。よりくむせつけよへと言ひまを歎八  
お貞政右辺左辺を見まらりて僅々の荷物を携へり  
と見まらば苦七の速速くも葛霧を肩ふて脊戸へとや  
忍び出さ一松子ゆゑ後まらせんと歎八がま出さる方へ  
周の里元暗き極先と急ぐ候も見まらりて近出さんと

するたづみみ流が所なるも端後引ばし一助の  
蒙小片とよりまきと後方の控と仆らとき極の端  
あそ便費とあつらふおしるんときるぬ腰をねば  
六の情と身とわがま公頼のふ焦燥折しも此お音の  
孩童寛げん危厨の外なる奴隸等がまら盗賊の入る  
たるぞ出よ出よと喚りつらぬぬも小棒をど引提て今  
歎八が仆まらる辺近く我を寄り這る体を現るも  
危客再びお孩童まきまきして領史忙然しりり其申はて  
一個の奴隸歎八が形容の氣をつけ左視右視つ獨を

貞頼人々の對ひ言ふ中、遠野丈收の去来よりして見  
女と偲み此家の宿に永の月日を送るや、ふ盤纏も  
残らざむの深し、初ての兒女、茶をさへする夏  
の、とて涙を添へて歎くゆゑ、の旅店より後  
の、客の泊らむとて逃出さんも易けと基より、這  
方のお旦那の生得の佛性、ゆゑ不便とや思はせけん、種  
種とい利て、夫より這奴の日雇、お出空の残、おの  
ま目を送るふ不買、るや、旅籠の決、お貸、おの  
夫の、とて、医者ど、の、茶の、乳、之、二月三月、帰、り、を、辨、ひ、も

世を見、身、身、法、法、及、及、殊、殊、の、物、物、を、携、へ、て、此、極、端、の  
う、ろ、の、夜、夜、を、と、ま、ん、と、ま、る、る、べ、い、是、れ、お、思、ひ、廻、ら  
ま、の、衆、衆、見、別、の、男、女、此、家、へ、伴、ひ、来、り、し、も、斯、る  
伎、倆、を、な、さ、ん、と、て、豫、て、計、ら、し、一、度、お、言、ふ、一、個、の  
猶、奴、が、余、り、と、と、お、貞、頼、一、院、の、裡、に、見、ま、し、と、て、佛  
を、見、女、の、見、へ、ざ、る、那、村、の、擔、奴、が、逃、遠、く、も、伴、ひ、お、ふ  
疑、ひ、な、し、然、も、お、お、此、の、お、お、は、是、なる、野、丈、を、結、り、を  
且、那、お、来、由、を、報、知、稟、さ、ん、と、お、四、辺、の、お、を、つ、け、る、ら、ど  
取、る、迹、し、と、言、ふ、お、お、の、奴、隷、等、も、現、れ、余、り、と、言、ひ、

女賢四輯の

ほ、も右充より取付是障の秘長ぬ歎八の言解ん中  
詮術をく。只一言遠行の捕へらまて六お竹が安危も氣  
まへ一六奈のめせんとなりり比を掃り心を苦しむるの  
道く道六のうさぎのけま

第三十回

奇中の一奇 猴能人を助く  
苦中の一苦 奸復賢を遣む

前話休題 変みまの苦七の件 葛籠を肩みて 歎八の  
先立ち速くも庭へ下立し縁にて心は伎倆のま六骨  
より仕組し謎索を率き 端後の掛渡し掃り完全

歩懐より番戸はより走り出北東の方を公ぎし里の  
ほを七行程ふたや一里程も迹延り屢々後方を顧るふ  
邊の来る人もあらずま六 針路を思ふ當りぬと思へば  
心も落着きて頼て片辺の松蔭へ件の葛籠を下し  
身中の汗をお拭きの骨を折らせより余りの首  
尾よく斗りし上六 黄金の花を咲かせるもとを遠くぬ  
夏なる心し其の就ても此兒女を奈何ゆも計りて梅  
太希等が形跡をおろぐ白状させんと言ひつる葛籠の  
蓋を明け病勞息するお竹と會釈もなく引出

圓る眼を視ひま最前まをも今まをも実と見せ  
たらん身も連出さんと思ふゆゑ空うあらうてん  
持あせ出さねば輝が速るるを懐さぬイヤサお竹雜  
おん身 日か多塚の兄梅太常が家出せしとき  
先ハ初うくと定めておん身も言ひ盡つらん包まば  
我もふおしるがおん身ハ此後佐け瑞きん若史ともみ  
つと強さ六丈六どの館へ連ぬ火水の拷問をせると  
あな在家を言ひまねば此身のゆゑがかるひがうし  
りまの初推うぬぬぬの字も其體を苛み妻ふあらん

より今速く我もふおしるがおん身も言ひまねば  
兄も言へど梅太常ハ肉身分一兄妹もなげ遠くハ豊  
鳴の浮浪人袖宮秀齊の獨子ゆておん身も縁も縁  
ゆもも言をゆ時まをもはくと懸して重身罪を被らんハ  
最悪しき度なりとや彌々ゆゆを我も言て身の明白共  
まをいと威しり欺しり問ひ辨るをお竹ハ始終を祈し  
あうくまもふおしるがおん身も言ひまねば此身のゆ  
氣よゆてせし人吾等を欺して速出さん此言は偽なり  
よるとも知らざるが今まをも甘き言を言せ信として



其のいづれに基より吾後の兄弟の在るべき方を知り  
ぬどもより知る連も汝がごとき人を謀つて身せむる大悪  
元道の白徒み争り實を報知へまごト威ふ似氣の  
利害の一言憎さも憐れと思ひぬぞ苦七の忿まる声  
なりひげ此児女がまろく氣ふゆり先へ生色しとを言  
せとまごは移くと丈人を懼れぬ今の言分我梅太弟の  
初集と云ふねあんと思へばこそ今も言を和らげ  
ば荒き所なるもせむりしは汝實を報知ると言ひ病人  
の女でもま行ふ用捨がなるべし。如縣へ侍ひぬ

或は赤くひるひの青くまはく怒りぬ梅と云ひけん持る  
小枝と振揚るかの色余やふ死すべし今一鼓小教と云  
ません死するうぬめて後悔まると言ふより速くまると云  
ひーがんとまるとおしも不思議や旅行の懐より光明と云  
鬼まきて若七が眼をあやぶ流石殊名の白徒もまもあ  
漢まいつ仰さぬ小介を須臾忙然と云ふか又懲むぬぬち  
あがり只一敵と放る時にも生後りくる松蔭より理屈出する  
二隻の大猴其さぬ牝牡のどくあるが忽然とて走り近づま  
一隻の若七の右も小走り討き一隻の脊も飛つて去湯ぬ



そとへ引外し顔駭のきまひるく二隻の猴し七掻び  
きび苦七いひつゝ周章掻き振り掛りて適きんと掻  
けぶも置かまといつゝ掻破りまき齒立ちらき苦七いひ  
赤ぬ膝とてもぐり苦しむきうちぬ猴ハ一変叫ぶもいび  
苦七が咽へ喰ひつゝかぬ地息ハ終ふける勅る不思義の  
佐けを得七お竹ハ後き且果てて猶疑ハハ眺る竹ハ  
件の猴ハ苦七が死骸を四下の釜へまらむらそ竹は外  
たろお竹とびりつゝらごごく救ひ記しら中をら葛籠の中ハ  
馬にせし一隻の猴ハ後前より押もしら鬼もしら山路を

きして泣きどまお竹ハお易いふほど立更さ人も叶いぬ  
身ハ又詮術もららざるに安る、修ふありくと何國  
さる多く伴ハさける鳴呼今お竹ハ身の浮沈二隻の  
猴ハ傍りさし人伴り不傳の什麼奈ら下回あつゝて  
分解まべ一前話分兩頭諸も指村ハ崎の女隠居真  
間の愛嬉ハ此程測湾の繩をみてお安と擲ぬ捕りより  
男ハこののちをとりて添くもつゝそ他ハ報かむ密りふ  
一院の裡ハ置て索せ許し衣服と宛へ旦那夕の合る  
えんせ尽せし餐庇振ふお安ハ更ふ合奥ゆふら  
女八賢四輯の一  
十五

ぢも放公はなつかみと十日とちゅうたつりたどとるあ或あるとまい一個いちごうの腰こし元もとが  
件けんの一院いちいんの歩あゆみ来きらあ安やすがわらう人ひと我われも寄より此こゝ程ほどより  
あて最さい永えいき春はるの目めと只ただ一院いちいんのと蜜みつ苑えんて在あるまは花はな  
然しかも悔くららん主人しゅじん愛あい嬉きも目めおおると同どう慰ゐめんと思おもへ  
ぢも扇あふぎが谷ちや家けへたをうりの又またもまふしもひらきまはると公こうもぢも  
目めを送おくりしが今いま宵よひの珠たまのとま去さ雨あめの最さいあち中ちゆうの降ふりして  
物もの凄せましきも一人ひとりのと密ひそふ母おや屋やへ侍さむらいの春はるをせわのハ  
うくとも酒さけひらり鞠まりのと思おもふと思おもふとよの吾われ侘わとあつたか  
はのとう秀ひでるへ遠とほくへと言いひつりも先まにまて同どう毎まいの

紙し間まとが押お用うに住す程ほどにお安やすい引ひきと引ひきもいよく  
不ふ審しんの晴はらぐく我われひやまのて捕とらましと斯かく今いま頃ころの敷しき  
侍さむらいのとうらふふ公こうよると侍さむらいへ同どうく真ま間のと密みつ嬉きの扇あふぎ  
が谷ちや家けへ取とり入いりて不ふ愛あいの財さい宝ほうと貯たくわへると命いのちの白しろ徒とでま  
まぢ此こゝ程ほどよりの懇こん切せつ懇こんのと深ふかき伎ぎ倆りやうひると公こうのと思おもへ  
でひるまると思おもへど阿あ容ようなる血け氣きなると彼か腰こし元もとの後のちは  
つきて精せい我われ間まをうらうやど願ねがて買かひまうらう一院いちいんのと思おもへ  
彼か腰こし元もとのと秀ひでると作あけりとお安やすきぬを剛たうちと思おもへ  
お候まうしてと言いへと色いろ嬉きの听きめど遠とほく出い出でて遠とほ方かたへ

女八賢四輯の一

遠方へともせ獲りつ 猶と座の押居るをお安の辞とて席の  
ほうど僅ふ 下望の座を占て 初対面の後をさへ寒暄と  
演安否を問ふ 言話並ひも 叮嚀の最教ひて 物の  
まじりも然りとも 些も臆も 体々 挨拶も後  
お安の形容を びらうともて 吾侪の基より 賤の者ゆへ 御  
才も智もなきの 嚮の 洲の 繩もあて 義のなる  
身とちと 僅くも 申威を 譲りせし 運拙くも 擒とられ  
今ハ首を討り 聖ハ命をゆさりと 思ひのつら  
蒙と許さる 一院の 裡の 餅洞まで 衣食ハまよ たり  
暮の發の 肺り 化粧さへ 心をつけさせ 累會頃ハ  
做ふこと 捕らるの 身ハ 似合し くらく ぶらぶら  
禪の 首を 刻させ 義の なる 死ね 吾侪が 命運も 武運ハ  
尽さば 死に 寛の 本意 ありと 言ふ せ 電燈ハ 懸りて  
おん身ハ 義婦あり 勇婦あり 假令 擒ふら 是と 争う  
刃を 當らる べき 定正 ぬら 兎も 是角 まで 電燈ガ 莊園ハ  
代て ありと おん身ハ 命ハ 助けの さん 夫等 の みの 殺  
念なく 心の けく あり ぎて 先一 献と して 是よと 言ひ  
は 後方 せ 見え 且 腰元 等ガ 御 後 准 儀の 洒 殺 せ

所せまを安排を色嬉に見り嘆一氣に故てをせよに  
取りひげ秀毒試と進せんと言ひり干て安めを  
望を我より受りて思ひ寄るざる今宵の四蛇を盃  
まを賜りる夏よりとび此うあやけりへまと言ふを色嬉  
所りぞ開の逢く方一お安どの私うお解てる方うに  
女意があらう面白う今宵一夜の上下の別を  
捨て腰元どもあらても思覚へ一夏を代るぐ藝  
尽一をそお安どのを屬りよと言ひて殿の腰元が  
小願の打あつらさう傳向する言中を年をさる  
我に出の前さぬのお言活々うお腰元のお女等が此の  
だ一をいふとを鎌倉成長のお安さぬお目お  
かぶるくお笑ひあつらるのこめて不肉あやうけん  
夏より矢張の意入りの飛太希の舞ひのよせト  
言ハ色嬉ハお含咲吾情も余ハ思ひ一とまら腰元  
等が拙き藝をたしめあさせて後小飛太希を見せ  
進せんとお角のふエと盡しを和女が速くも海口を  
とち影へて置がご一頓飛太希を遠方へ百せと言ひまを  
件の腰元ハ恋と侶み身せ起一次の間指てのうらぶ秋て

一間の白り来る誘毒太常どの遠方へと呼まて入  
 来る美少年八常まご二八の髪も容貌の艶妖  
 多る昔古の在吾中將り光源氏の初被りと思ふまじりの  
 美艶が艶嬉み對ひて禮をさし又か安んず一礼して  
 完あそ笑ひて着る人愛らしくもまじりて艶嬉を  
 ちりも腰元等もさる悦懐として見とまける早竟竟太常か  
 一間ふ忍進て後甚麼多る輝さるるを丹へ下田の  
 分るを視て知らん

村田

貞操婦女八賢誌五編上

十  
 中  
 八  
 賢  
 誌

